

研究ノート

大谷吉継の南宮山下布陣説について －「青野カ原」合戦の实在性証明へのプロセスとして－

白 峰 旬

慶長5年（1600）9月15日の関ヶ原本戦において、大谷吉継がどこに布陣していたのか、という布陣場所（戦った場所）については、重要な問題である。関ヶ原本戦に参戦した藤堂高虎（徳川家康方）の家臣・藤堂新七郎関係の家乗などに以下のような記載がある。

藤堂新七郎とは、「藤堂新七郎家々譜」⁽¹⁾によれば、藤堂良勝のことであり、前掲「藤堂新七郎家々譜」には「士大将、小姓組共、二万石」とあるので大身家臣（重臣）であり、元和元年（1615）5月6日、大坂夏の陣で51歳で戦死している。

〔新七郎家乗〕⁽²⁾（下線引用者、以下同じ）

a 九月十五日御合戦之刻、南宮山にて大谷刑部少輔居申所、b 城戸口にて踏留、鎧を合高名仕候

〔新七郎家来浜一右衛門覚書〕⁽³⁾

関か原前岐阜城責、関か原表一番乗被成候、御供いたし候、c 南宮山にて御踏留之時、北の口にて鎧を合首を取、金七殿と一所に相働、御存知之事

〔藤堂姓諸家等家譜集・藤堂新七郎家〕⁽⁴⁾

関ヶ原

慶長五年、関ヶ原の役前夜岐阜を攻め、d 南宮山下に大谷刑部を攻めて著功あり

下線aは、9月15日の合戦の時に大谷吉継が南宮山に布陣していた、としている。下線bは、藤堂新七郎が「城戸口」にて踏みとどまり（大谷吉継の軍勢と）鎧を合わせて、高名をなした、としている。

下線cは、藤堂新七郎の家来の浜一右衛門が、（大谷吉継の布陣場所である）南宮山の戦いにおいて藤堂新七郎が踏みとどまった時、「北の口」において（大谷吉継の軍勢と）鎧を合わせて、（敵の）首を取った、としている。

下線dは、藤堂新七郎が南宮山下に大谷吉継を攻めて、著しく戦功があった、としている。大谷吉継が布陣した場所が、「南宮山」（下線a）なのか、「南宮山下」（下線d）なのか、という点は、戦った場所について、「城戸口」（下線b）、「北の口」（下線c）という記載があるので、「南宮山下」（下線d）に大谷吉継が陣地を構築していて、その陣地の虎口（^{こぐち}出入り口）を「城戸口」（下線b）、「北の口」（下線c）と表現しているのであろう。陣地の虎

口であるから、当然、戦いの攻防の場所になったと思われる。

下線 a について、『高山公実録』の編纂者は「〔謹按〕南宮山は大谷の陣所とは大に隔たれり、然るを家乗に南宮を大谷の陣所とす、訛れり」⁽⁵⁾ というように記して、南宮山を大谷吉継の陣所とするのは誤りである、としているが、これは後世の江戸時代後期（『高山公実録』の成立年は文政年間〔1818～1830〕⁽⁶⁾）における『高山公実録』の編纂者によるコメントであって、同時代の指摘ではない。

藤堂新七郎は、実際に大谷吉継の軍勢と戦ったのであるから、戦場があった場所を間違えるとは考えにくい。よって、関ヶ原本戦における大谷吉継の南宮山下布陣説は、かなり信憑性が高いと思われる。

大谷吉継の布陣場所が南宮山下であるとする、と、「（慶長五年）九月二十日付近衛信尹宛近衛前久書状」（陽明文庫所蔵）⁽⁷⁾ において記されている「青野力原」での合戦（福島正則など家康方軍勢が大谷吉継を攻撃して、その際、小早川秀秋が裏切った結果、大谷吉継が戦死した）とは、南宮山下での戦いということになる。そして、前掲「（慶長五年）九月二十日付近衛信尹宛近衛前久書状」の内容を考慮すると、小早川秀秋の布陣位置は大谷吉継の布陣位置の近くであった可能性が高い。

あおのがはら「青野原とは現在の岐阜県大垣市の北西端青野町を中心に、東の青墓町から西の不破郡垂井町府中にかけて比定される野原である（『日本歴史地名大系』）」⁽⁸⁾ ので、南宮山下⁽⁹⁾ に布陣した大谷吉継が戦って戦死した合戦が「青野力原」合戦であり、「青野力原」合戦の実在性が証明されたことになる。

それでは、通説で南宮山に布陣した、とされている毛利秀元などの軍勢は、実際にはどこに布陣していたのであろうか。

近年、城郭考古学が御専門の千田嘉博氏は、航空レーザ測量の分析から、①南宮山に大軍が布陣したとは思えない、②毛利秀元の軍勢の主力は南宮山の山頂にはいなかった、③今まで南宮山に毛利軍がいたとされてきたが毛利本隊がここにいた可能性はない、④南宮山の北側に南宮大社があり、駐屯するとすればそのあたりが都合がいいと思われる、と指摘している⁽¹⁰⁾。

このように、千田氏は毛利本隊の南宮山布陣を否定し、南宮山北側の南宮大社付近を毛利本隊の布陣場所として想定している。

しかし、私見では、上述のように、南宮山下に布陣したのは毛利本隊ではなく、大谷吉継であったので、毛利本隊の布陣場所として他の場所を指摘したい。

「慶長記」（「慶長年中卜齋記」）には以下のような記載がある。

〔慶長記〕⁽¹¹⁾

e 翌日十五日朝、垂井の南、岡か鼻と云山に、安芸宰相・吉川駿河守（蔵人頭カ）・長宗我部土佐守・長東大蔵・安国寺二万計、弓・鉄炮先に備、段々に居陣也

下線 e は、9月15日の朝、垂井の南方に位置する「岡か鼻」という山に、毛利秀元・吉川広家・長宗我部盛親・長東正家・安国寺恵瓊の軍勢2万くらいが、弓（隊）・鉄炮（隊）を先に配置して、段々に布陣した、としている。

それでは、この「岡か鼻」（下線 e）とは具体的にどの場所を指すのであろうか。この点については、深沢晋治

「1586 年天正地震における養老・宮代断層に沿った地殻変動を示唆する資料」⁽¹²⁾ に詳しい。

この論考から「岡か鼻」の関係箇所を引用すると以下ようになる。

- (1) 岡ヶ鼻は象鼻山の南麓にあったことになる。
- (2) 天正 13 年（1585）、美濃で大地震があり、「岡ヶ鼻は一夜の内、田地の上にゆり上げ、岡ヶ鼻台地出来仕り候」と橋爪村より、元禄期、領主に呈出した文書に記載がある。
- (3) 岡ヶ鼻は東方に広がる耕地より二メートルほど高い台地になっているが、現在では誰も不思議に思わない。山に近いところだから当然としている。
- (4) 現在、岡ヶ鼻は養老町橋爪の小字として、象鼻山の南麓に位置する。
- (5) 岡ヶ鼻の位置は『復刻版養老郡志』によると「岡ヶ鼻は南宮山及栗原山の南方に位し、日吉村大字橋爪に在り」と記されている。この頃(大正期)までは象鼻山を含めて南宮山に続く山稜を栗原山と称していたようである。
- (6) 『復刻版養老郡志』には、関ヶ原合戦に従軍した土豪の西脇久左衛門の自書（廣畑村西脇貫一氏所蔵古文書）が引用され、その中に橋爪村や岡ヶ鼻の名が記される。西脇久左衛門は竜泉寺村（現・養老町竜泉寺）の人で、寛永 19 年（1642）に没した。
- (7) 現時点で岡ヶ鼻の大部分は裸地である。
- (8) 絵図『正徳五年山田井組六ヶ村と沢田村水論裁許状』[『垂井町史史料編』（1968）]には岡ヶ鼻付近が「岡鼻台」と記載されている。このことから、江戸時代中期の岡ヶ鼻は台地のような高台であった可能性がある。
- (9) 岡ヶ鼻地区は、宮代断層の南端部に位置する。
- (10) 『養老町史史料編下巻』に所収された『多岐神社旧記』（初稿 1653 年、最終写 1830 年）には、天正 13 年に大地震があつて養老郡養老町橋爪字岡ヶ鼻と海津市南濃町志津に土地の「ゆり上」が起こつたと記され、『橋爪の歴史』に引用された仮称『元禄の古文書』（推定 1701 年）では、地震で岡ヶ鼻に一夜のうちに台地ができてと記録されている。

以上の点を考慮すると、岡ヶ鼻は象鼻山の南麓に位置し、天正 13 年の大地震によって一晩のうちに土地が隆起して出来た台地（高台）であつた、ということになる。

とすると、毛利秀元などの軍勢が布陣した「岡か鼻」（下線 e）という山とは、南麓の岡ヶ鼻（台地）を含めた象鼻山のことを指していることがわかる。

慶長 5 年当時の一次史料で毛利秀元などの布陣地を見ると、以下ようになる。

「(慶長 5 年) 9 月 12 日付祖式長好宛吉川広家書状」⁽¹³⁾

(前略) 其以後濃州表へ打出之、f 去七日南宮山と申二陣執候（後略）

下線 f は、吉川広家が 9 月 7 日に「南宮山」に陣取りをした、としている。この場合の「南宮山」が現在の南宮山と同じ場所ではなく、当時、象鼻山も含めて、現在の南宮山につらなるエリア一帯の山を「南宮山」と呼称していた可能性も考える必要があろう。

「慶長5年9月23日付横山伝兵衛宛毛利秀元感状」⁽¹⁴⁾

g 今度濃州南宮打入之刻、敵付立候処 (後略)

下線gは、この度、毛利秀元が美濃の「南宮」から退却の時、としている。この場合、「南宮山」ではなく、「南宮」と表記している点は注意する必要がある。つまり、「南宮」とは、「南宮山」を指すのではなく、南宮神社があるエリア一帯（象鼻山も含む）を指している可能性も考える必要があろう⁽¹⁵⁾。

「(慶長5年9月26日頃カ) 片倉景綱宛伊達政宗消息」⁽¹⁶⁾

(前略) h もうりさいしやうわつか一まん五千計の人しゆにて、大かき南の山へうちいて候 (後略)

下線hは、毛利秀元(毛利宰相)が1万5000くらいの軍勢で、大垣城の南方の山へ出陣した、としている。この場合、大垣城の南方の山としている点は注意する必要がある。つまり、南宮山は大垣城の西方にあたり、象鼻山は大垣城の西南方にあたる。よって、大垣城の南方の山というのは、南宮山ではなく、象鼻山を指している可能性が高い。

以上のように、本稿での検討によって、①慶長5年9月15日の関ヶ原本戦において、大谷吉継は南宮山下に布陣していたこと、②その結果、「青野カ原」合戦の実在性が証明されたこと、③毛利秀元などの軍勢は、南宮山ではなく、象鼻山（南麓の岡ヶ鼻〔台地〕を含む）に布陣したこと、が明らかになった。こうした点は通説と大きく異なる点であり、今後、通説の再検討に大きな影響を与えるであろう。

今後の課題としては、追撃戦と想定されるその後の戦い（大垣城から西方に退避して行軍する石田三成などの軍勢を家康方軍勢が追撃した戦い）との関連をどのように考えるのか、という問題があるが、その点は今後順次考察をおこなっていく予定である。

[註]

- (1) 林泉・編著発行『藤堂姓諸家等家譜集』(1983年、48頁)。
- (2) 上野市古文献刊行会編『高山公実録』上巻(清文堂出版、1998年、226頁)。
- (3) 前掲『高山公実録』上巻(208頁)。
- (4) 前掲『藤堂姓諸家等家譜集』(46頁)。
- (5) 前掲『高山公実録』上巻(226頁)。
- (6) 上野市古文献刊行会編『高山公実録』下巻(清文堂出版、1998年、943～956頁)の「解説」(久保文武氏による執筆)では「本書(引用者注：『高山公実録』)はいづ誰によって、どういう意図のもとに編纂されたかという点に関しては不思議なことに全く詳らかでない。序文も跋文もない。」「要するに、『高山公実録』の成立時期は文政年間以降であるということは確実である。」「『実録』(引用者注：『高山公実録』)成立時期の下限は文政十一年までということになる。」「(引用者注：『高山公実録』の編纂者については)そこで一つの仮定として先に挙げた藤堂出雲家九代高芬(天保十一年・一八四〇、五十六才没)の存在が

考えられる。」「以上は『高山公実録』の編纂者、編纂時期についての一つの仮説である。」としている。

- （ 7 ） 藤井譲治「前久が手にした関ヶ原情報」（田島公編『禁裏・公家文庫研究』第六輯、思文閣出版、2017 年、後に、藤井譲治『近世初期政治史研究』、岩波書店、2022 年、に収録）。この近衛前久書状の現代語訳については、拙稿「関ヶ原本戦について記した近衛前久書状」（日本史史料研究会監修・白峰旬編著『関ヶ原大乱、本当の勝者』、朝日新聞出版、2020 年）を参照されたい。
- （ 8 ） 前掲・拙稿「関ヶ原本戦について記した近衛前久書状」。
- （ 9 ） 現在の南宮大社の住所は、岐阜県不破郡垂井町宮代である。宮代村（現・岐阜県不破郡垂井町宮代）は府中村（現・岐阜県不破郡垂井町府中）に近接していたので、南宮山下は青野原のエリアに入ると考えられる。
- （ 10 ） 千田嘉博・平山優『戦国時代を変えた合戦と城―桶狭間合戦から大坂の陣まで―』（朝日新聞出版、2024 年、387 ～ 388 頁）。
- （ 11 ） 「慶長記」（小野信二校注『家康史料集』、人物往来社、1965 年、469 頁）。
- （ 12 ） 『歴史地震』34 号（歴史地震研究会、2019 年）。
- （ 13 ） 『吉川家文書・別集』〈大日本古文書〉（東京帝国大学文学部史料編纂所、1932 年、609 号文書、441 ～ 442 頁）。
- （ 14 ） 『新修福岡市史』資料編、中世 1（福岡市、2010 年、1114 頁）。
- （ 15 ） 『高山公実録』（前掲『高山公実録』上巻、220 ～ 221 頁）所収の「関原戦場圖」では、「安藝中納言」、「長束」、「安国寺」、「吉川」の布陣場所は「南宮」の南、「牧田」（現・岐阜県大垣市上石津町牧田）の東に位置している。この場合、「南宮山」ではなく「南宮」と記されていること、本稿で毛利秀元などの軍勢の布陣場所に比定している象鼻山は「南宮」の南、「牧田」の東に位置している点には注意する必要がある。なお、『高山公実録』所収の「関原戦場圖」は、拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実―脚色された天下分け目の戦い』（宮帯出版社、2014 年、170 ～ 172 頁）にも収載されているので参照されたい。
- （ 16 ） 『仙台市史』資料編 11〈伊達政宗文書 2〉（仙台市、2003 年、1077 号文書、99 ～ 100 頁）。